

第80回

休日の

# 午後のコンサート

6.23 (日) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Sun. June 23, 2019, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

## 〈華麗なる舞踊の世界〉

Music Inspired by Dance

指揮とお話 チョン・ミン

Min Chung, conductor & speaker

※指揮者のプロフィールはp5をご参照ください。

コンサートマスター 三浦章宏

Akihiro Miura, concertmaster



チャイコフスキー：歌劇『エフゲニー・オネーギン』Op. 24 より“ポロネーズ” (約5分)

Tchaikovsky: Polonaise from opera “Eugene Onegin” Op. 24 (ca. 5 min)

チャイコフスキー：バレエ組曲『白鳥の湖』Op. 20a (約25分)

Tchaikovsky: Ballet Suite “The Swan Lake” Op. 20a (ca. 25 min)

メンデルスゾーン：交響曲第4番『イタリア』Op. 90 より第4楽章 (約5分)

Mendelssohn: 4th movement from Symphony No. 4 in A major, Op.90 “Italian” (ca. 5 min)

— 休憩 intermission (約15分) —

ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 Op.92 (約40分)

Beethoven: Symphony No. 7 in A major, Op. 92 (ca. 40 min)

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) |

独立行政法人 日本芸術文化振興会

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |

Japan Arts Council

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

6.23

「チョン・ミンが贈る「華麗なる舞踊の世界」

今回の「休日の午後のコンサート」は「華麗なる舞踊の世界」。東京フィルのアソシエイト・コンダクター、チョン・ミンが、リズムカルな名曲の数々をお届けします。

チャイコフスキーの歌劇『エフゲニー・オネーギン』の“ポロネーズ”は、ポーランドの緩やかな民族舞曲。『白鳥の湖』はもちろんバレエの舞台に沿った踊りの音楽です。メンデルスゾーンの交響曲第4番『イタリア』の第4楽章は、サルタレロというイタリアの快速舞曲を用いたフィナーレ。ここまでは文字通り舞踊の音楽です。そしてベートーヴェンの交響曲第7番は、全編でリズムが強調された作品。ワーグナーによる「舞踊の神化」の形容でも知られています。つまり今回は、大規模なクラシック音楽の中に舞踊の要素を盛り込んだ作品揃いである点が妙味ともいえます。

若きマエストロが生み出す、父チョン・ミョンフン譲りの熱気と躍動感への期待も十分。胸が弾み心が躍る音楽を大いに満喫しましょう。



この6月には「イタリア交響楽団」との来日公演も行い注目を浴びた若きマエストロ、チョン・ミン

6.23

## プーシキン原作の 悲恋のオペラから高貴で華やかな舞曲を



Pyotr  
Ilyich  
Tchaikovsky

まずは開幕に相応しい華やかなナンバー、ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840–1893）の歌劇『エフゲニー・オネーギン』より“ポロネーズ”でスタート。チャイコフスキーはオペラにも相当な力を注ぎ、10を超える作品に挑みました。本作は、1878年に完成された通算5作目のオペラ。翌年モスクワで初演され、後の『スペードの女王』と並ぶ代表作となりました。文豪プーシキン原作による全3幕の物語は、「田舎娘タチャーナの純愛を冷たく退けた貴族の青年オネーギンが、数年後に美しいグレーミン公爵夫人となったタチャーナと再会し、改めて恋心を抱くも、今度は彼が拒絶される」といった内容です。

“ポロネーズ”は、第3幕冒頭のグレーミン公爵家の舞踏会で演奏されるオーケストラ曲。幕開けのファンファーレに続いて、ポロネーズの様式による堂々とした音楽が展開され、貴族の華麗な世界が表現されます。ちなみにポーランドの民族舞曲ポロネーズは、「タンタタ・タンタンタン」のリズムによる3拍子の舞曲で、2拍目のアクセントが特徴です。

## 全バレエ作品の代名詞『白鳥の湖』を演奏会用組曲で

おつぎは、同じくチャイコフスキーのバレエ組曲『白鳥の湖』。作曲者の三大バレエの第1作にして、古今のバレエの代名詞ともいえる名作です。1875～76年、ボリショイ劇場の依頼で作曲され、1877年の初演は不評でしたが、名振付師プティパと助手イワノフによる1895年の蘇演を機に普及しました。全4幕の物語は、「悪魔によって白鳥の姿にされたオデット姫を愛したジークフリート王子が、悪魔とその娘の黒鳥に嵌められながらも、天上で姫と結ばれる」といった内容。ただし、結末を含めた構成は舞台によって異なります。

今回は、1882年にチャイコフスキー自身が構成したとされる演奏会用組曲に基づく6曲が披露されます。

6/23

6.23

1. **情景** 第2幕冒頭の哀愁を帯びた音楽。オーボエが「白鳥の主題」を歌う、本作の看板曲です。
2. **ワルツ** 第1幕の群舞における、優雅で変化に富んだ大スケールのワルツ。
3. **白鳥たちの踊り** 「4羽の白鳥の踊り」の題でも知られる、第2幕の軽妙な音楽。
4. **情景** 前曲に続く王子とオデットの愛の踊り。ハーブ、ヴァイオリン、チェロのソロが際立った、ロマンティックな音楽です。
5. **チャールダーシュ：ハンガリーの踊り** 第3幕で披露される民族舞曲の1つ。哀愁漂う緩徐部分から明るい快速部分に移る情熱的なナンバーです。
6. **情景** 切迫感を漂わせた「白鳥の主題」を中心に激しい展開を遂げる、壮大なラストシーン。



「白鳥の湖」は、『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』と並んで「世界三大バレエ」の一つとされる

## 陽光輝くイタリアの印象を凝縮した メンデルスゾーンの代表作

前半最後は、ドイツ初期ロマン派の代表格フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847)の交響曲第4番『イタリア』より第4楽章。1830年にイタリアを訪れたメンデルスゾーンは、各地をまわった後、11月から翌年4月ま



Felix  
Mendelssohn

でローマに滞在しました。当地の南国的な空気や謝肉祭などの風物に刺激を受けた彼は、滞在中に本作の創作を開始。1833年にベルリンで完成され、同年ロンドンにて初演されました。しかし彼は改訂を重ね、出版されたのは没後の1851年。それゆえ第2、3番よりも前の作ながら第4番となりました。

本作には、ハンブルクに生まれ、ベルリンで暮らす北ドイツ人メンデルスゾーンが受けた陽光輝くイタリアの印象が、明快に反映されています。中でも顕著なのが「サルタレロ」と記された第4楽章。躍動感満点の急速なフィナーレです。サルタレロは「小さな跳躍」を意味するイタリアの激しい踊り。同楽章では、開始直後に出される弾んだ主題を軸にしたサルタレロが、畳み込むように展開され、中盤には3連音が流れゆくナポリの舞曲タランテラ風の主題も登場します。それにしてもこの華やかな音楽が短調で書かれているのは意外なところですよ。

## ベートーヴェンの生前に 最も成功を収めた第7交響曲

後半は、ウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲第7番をたっぷりとお聴きいただきます。本作は、交響曲第5番『運命』&第6番『田園』の初演から約3年を経た1811年夏頃に

作曲が開始され、1812年5月にほぼ完成された、創作中期の後半の所産。1813年12月、ウィーン大学講堂における「戦争傷病兵のための慈善コンサート」にて



初演されたウィーン大学講堂（現在はオーストリア科学アカデミーの本部）



Ludwig  
van  
Beethoven

初演されました。ナポレオン軍に対する戦勝ムードの中で開催された同公演は、受け狙いの「戦争交響曲『ウェリントンの勝利』」も同時初演された、いわば祝賀イベントです。そこに明快でビートの効いた第7番はきわめてタイムリー。おかげで大成功を収め、生前におけるベートーヴェン最大のヒット交響曲となりました。

## 6.23

9つの交響曲1曲ごとに新たな試みを行ったベートーヴェンが本作で打ち出したのは、“リズムの徹底強調”。各楽章に一定のリズム・パターンが設けられ、カンタービレ（歌うこと）との共存が企図されています。アダージョやアンダンテといった緩徐楽章を欠くのも、それと連動した大きな特徴。ワーグナーが“舞踊の神化”と形容したように、交響曲において舞踊的な世界を構築したユニークな作品といえるでしょう。

**第1楽章：ポーコ・ソステヌート—ヴィヴァーチェ。**長めの序奏から、「ターン・タタン」の基本リズムに導かれて主部に入り、そのリズムに基づく第1主題と明るい第2主題を中心に、熱狂的な盛り上がりを見せます。

**第2楽章：アレグレット。**「タータタ・ターター」のリズム動機が全編に亘って奏される、哀愁を帯びた短調の音楽。中間部は明るめの楽想に変わります。「不滅のアレグレット」と賞される名楽章です。

**第3楽章：プレスト。**大規模なスケルツォ楽章。「タタタ・タタタ」の3連音を基本リズムとする弾んだ主部に、当時の巡礼の歌ともいわれる伸びやかなトリオ（中間部）が2度挟まれます。

**第4楽章：アレグロ・コン・ブリオ。**冒頭の「タンタタタン」を軸に複数のリズム動機が登場。開始直後の第1主題と躍動的な第2主題を中心に、圧倒的な狂乱状態がもたらされます。終盤のバッソ・オスティナート（低音による同一音型の反復）が与える高揚効果も要注目。



1813年、ナポレオン戦争でウェリントン侯爵率いる英国軍が勝利をおさめたビトリアの戦い（Thomas Jones Barker）

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。